

本能寺ほんのうじ（頼らい山陽さんよう）

本能寺ほんのうじ 溝みぞは 幾尺いくせき なるぞ

吾われ 大事だいじを 就なすは 今夕こんせきに 在あり

菱粽こうそう 手てに 在あり 菱こうを 併あわせて 食くろう

四簷しえんの 梅雨ばいう 天てん 墨すみの 如ごとし

老おいの坂さか 西にしに 去されば 備中びっちゅうの 道みち

鞭むちを 揚あげて 東ひがしを 指させば 天てん 猶なお 早はやし

吾わが 敵てきは 正まに 本能寺ほんのうじに 在あり

敵てきは 備中びっちゅうに 在あり 汝なんじ 能よく 備そなえよ

本能寺 溝幾尺 吾就大事在今夕

菱粽在手併菱食 四簷梅雨天如墨

老坂西去備中道 揚鞭東指天猶早

吾敵正在本能寺 敵在備中汝能備

解説 歴史に名高い本能寺の変を詠じ、光秀の暴挙を皮肉ったもの。

語釈 ※溝||ほり。※大事||光秀が主君信長を殺し、その権を奪うこと。

※菱粽||まこもの類の葉でちまきを包んだもの。※併菱||大事決行を目前に、光秀は沈思苦慮、ちまきの皮を剥くことも忘れ、そのまま食したと言う。

※四簷||家の疵、軒。※梅雨||梅の実の黄に熟するころ降る長雨。

※天如墨||空に墨を流したように暗いこと。※老坂||老坂峠は沓掛から亀岡の篠村を結ぶ峠。※天猶早||夜の明け方にはまだ早い時分。※吾敵||光秀が信長を指して言ったことば。※敵在備中||備中の国で戦っている秀吉をさす。山陽が光秀を皮肉った言葉として理解することが最も妥当である。

通釈 光秀は信長から高松城攻撃中の秀吉救援の先鋒を命ぜられ、居城丹波

亀山に帰る途中、愛宕権現に参詣し、俳人紹巴などと連句の会を催し「本能寺の溝の深さは何ほどか」と尋ねたが、その胸中、大事悲願を成就するのは今夕にあると決意していたのである。はやる心の光秀は、ちまきを皮ごと食べてしまったと言う。おりから梅雨の雨は軒の四方を降りどさし、空は墨を流したように暗かった。老の坂から西へ向かって行けば、備中への道である。だが鞭を上げてさし示したのは本能寺がある東の方角、まだ、夜の明けない早朝だった。光秀は、この時、「わが敵はまさに本能寺に在り」と叫んだのだが、光秀は、もう一人の強敵、備中の秀吉によく備えなければいけなかったのだ。